

## ④ 横浜市教員災害派遣 『石巻子ども学習支援隊』

### 1 はじめに

3・11。地震の発生とともに横浜市内の各学校では、児童生徒の安全確保の対応がなされた。児童生徒の校舎外への避難誘導、校舎の安全確認、保護者への連絡・引き渡し、保護者へ連絡がつかない児童生徒の対応等。この地震によって、様々な対応が学校・教職員に求められることとなった。

幸いなことに、横浜市内の学校では、大きな被害もなく、子どもたちも翌日には全員家族の元へ帰ることができた。

しかし、東北各地からは被災状況が明らかになるにつれ、また、時間の経過とともに、学校や子どもたちの置かれている状況の厳しさが伝えられてきた。

### 2 石巻子ども学習支援隊

#### ① 派遣の経緯

横浜市教育委員会では東日本大震災後に被災地の県や市に対して、独自に復興に関する短期間の教育支援についてニーズ把握を行った。その結

果、石巻市教育委員会から支援の要請があり、横浜市の教員の派遣を行うことを決定した。指導主事4名からなる先遣隊を中心に、現地石巻に職員を派遣し、石巻市教育委員会や石巻市立の各小中学校と調整を重ねた。その結果、夏休み期間中に児童生徒の学習を支援する学習支援隊として教員を派遣することとなった。

石巻市では、71校（小学校43校・中学校21校・高校2校・幼稚園5園）ある市立学校のうち、何らかの被害を受けた学校は、約7割以上の51校のほり、5月時点で授業を再開できたのは64校という状況であった。各校とも授業時間数が不足しており、夏休み期間を短縮し、不足している授業時間を補う予定となっていた。

一方で、石巻市では従来から夏季休業期間を活用して、県内の大学生による学習補助ボランティアが児童生徒への学習の支援を、市内2か所の高校を会場として行っていた。しかし、震災によって大学生自身も被災し、今までの学習

支援を実施することが困難な状況となった。本市としては、この学習支援を受け継ぎ、被災により生活環境の変化を余儀なくされた子どもたちも参加しやすいように、実施会場を17会場43学校に拡大し、夏休み期間のうちの一定期間、本市の教員で編成した学習支援隊により、きめ細かな支援をすることとした。

#### ② 先遣隊

被災地との調整等を行うために派遣した先遣隊の任務は、「石巻市教育委員会事務局（以下、「石巻市教委」）と被災地への教育支援の活動内容等を調整すること」であった。「被災地への教育支援」といっても、具体的な支援内容はまったく白紙の状態であり、調整の中でできることを探っていくものだった。

活動初日に現地を視察、石巻市の被災の現状や学校の状況などを確認し、「被災している石巻市教委、石巻の学校、石巻の子どもたちに徹底的に寄り添った話し合いをすること。相手のニーズをしっかりと

と把握すること。」の思いを新たにした。翌日の石巻市教委との協議で、「横浜市教育委員会事務局（以下、「横浜市教委」）は、夏季休業中に、石巻市に教育支援を行う」、「本活動に関する計画等はすべて横浜市教委で立案し、石巻市教委と協議しながら決定する」などを確認した。

横浜市教委において、教育長や教育次長を中心とするプロジェクトメンバーによる検討の結果、石巻市への学習支援隊派遣を決定し、5月末に石巻市の校長会で、概要を説明。こうして「石巻子ども学習支援隊」の取組はスタートした。

先遣隊はその後も現地において石巻市教委や各学校との調整役を担った。石巻市立の全小中学校を訪問し、校長に趣旨を説明するとともに、各校のニーズ把握を行った。

また、遠隔地の学校までの交通状況の調査や医療機関等関係機関との調整、直前の会場校との最終的な確認（避難経路や使用教室の確認等）等も行った。

### 執筆

柳下 則久  
教育次長

小野 博之  
教育委員会事務局総務部職員課長

前田 崇司  
教育委員会事務局教職員人事部  
教職員育成課首席指導主事

富士田 美枝子  
教育委員会事務局課長補佐  
（教職員育成課育成係長）

近藤 浩人  
教育委員会事務局  
東部学校教育事務所指導主事室  
主任指導主事



図1 石巻市

### ③派遣の趣旨

今回の震災で石巻市立の小中学校は甚大な被害を受けた。他校の教室を借りてスタートした学校や、避難所となっていたために教室の使用に制限がある等、児童生徒の教育活動上で影響を受けている学校も多かった。

また、避難所の運営等や遅れてスタートした授業を取り戻すための努力等、教員の働きは想像を超えるものであり、積み重なる疲労も課題となっていた。

こうした背景の中、夏休みの期間中に石巻市の子どもたちの学習を支援すること、それと同時に、これまで不眠不休で様々な活動に取り組んできた石巻市の教員たちに少しでも休養をとってもらうことが、派遣の趣旨であり、そのためだけに多くの教員を派遣することになった。避難所から、また、身を寄せる親戚の元から、学校へ通う子どもたち。この震災で多くの子どもたちの心が傷つき、痛み、その状況が続いていることが想像できた。今回の学習支援隊の最大の使命は、被災した石巻市の子どもたちのための学習支援である。石巻市の「子どもたち・ファースト」の精神で、教育に携わ

る者として、石巻市の子どもたちのためにできることをしていきたいと願った。

### ④派遣スケジュール

今回の学習支援は、石巻市の小中学生の夏休み期間となる8月2日～11日（土日を除く8日間）に「夏休み学習会」と称して実施した。

学習会当日は午前中に小学生、そして午後には中学生を学習支援することとした。1日目の夜にバスで横浜を出発し、2日目に石巻の各会場で学習支援を行い宿泊。そして3日目に横浜に戻るという2泊3日のスケジュールでのぞむことにした。（表1）

### ⑤支援規模（参加児童生徒数、会場、派遣教員等数）

#### ア 参加児童生徒数

6月中旬に石巻市立小中学校全校の児童生徒およそ1万4千名に「夏休み学習会」の募集を行ったところ、保護者が承諾したおよそ3千名の児童生徒からの申し込みがあった。実際にはその後の転居や家事都合等により欠席もあったが、中には、数日にわたって連続して参加した子どももいた。8日間の参加延べ人数は、小学生6,234名、中学生1,511名の合計7,745

名となった。

#### イ 学習支援に関する会場等（図2）

学習支援を行う会場については、多くの子どもたちが、それぞれの事情がある中でも参加が可能な開催形態となるよう、石巻市の各学校と調整を重ねた。その結果、すべての中学校ブロックで実施することとなった。一日あたり7～9会場、8日間で43会場を

設定することになった。会場となった各学校は、いまだ避難所となつていたりところが多かったが、教室や受付場所、保健室等の使用にも各学校の協力を得ることができた。

前半の週の4日間（第1グループ～第4グループ）は、主に石巻市郊外や遠隔地を会場として設定した。後半の週の4日間（第5～第8グループ）は主に石巻市街地の学校を会場とした。中には、遠隔

表1 石巻学習支援隊のスケジュール

派遣行程		出発日	活動日	帰着日
1日目夜	横浜出発（貸切バス使用） <車中泊>	8月1日	8月2日	8月3日
2日目朝	現地到着 （午前）小学校児童支援 （午後）中学校生徒支援	8月2日	8月3日	8月4日
2日目夕刻	宿泊施設到着 <宿泊施設泊>	8月3日	8月4日	8月5日
3日目朝	現地出発（貸切バス使用）	8月4日	8月5日	8月6日
3日目夕刻	横浜到着	8月7日	8月8日	8月9日
		8月8日	8月9日	8月10日
		8月9日	8月10日	8月11日
		8月10日	8月11日	8月12日

図2 「石巻子ども学習支援隊」学習会会場位置図

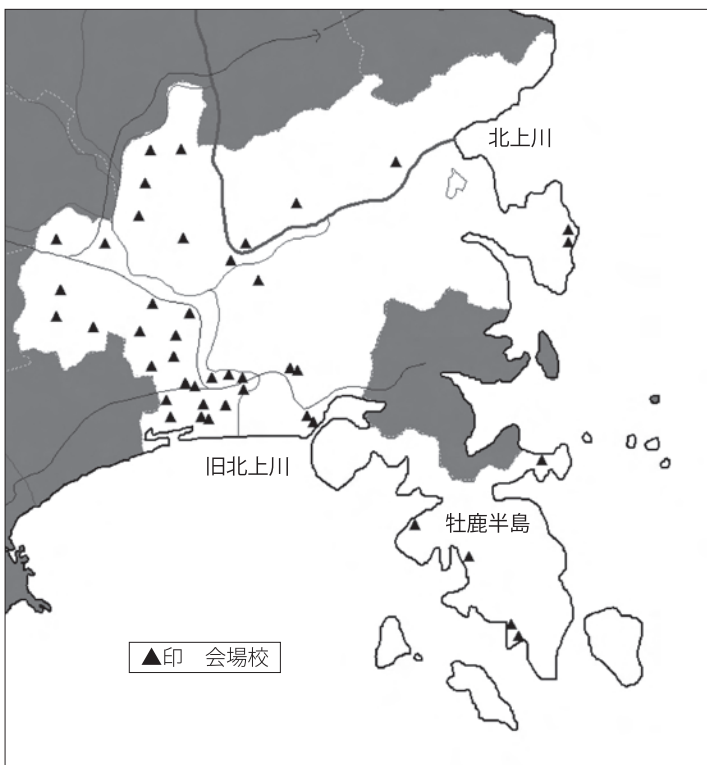


写真1 街道沿いから。中央奥に見えるのが大原小学校



地であり、甚大な被害を受けた牡鹿半島の海岸付近にある学校や、町全体が津波による壊滅的な被害を受けた地域にある学校もあったが、一人でも学習支援を受けたいと願う子どもがいる限り、横浜市として教員を派遣しようという姿勢でのぞんだ。

### ウ 派遣教員数

派遣する教員には、いかに目の前の子どもたちにしつかりと寄り添い接することができるか、適切な学習支援を行うことができるか、その使命と責任を果たすことが求められることとなった。

今回の教員派遣にあたっては、6月中旬より、横浜市立学校全校に「石巻子ども学習支援隊」の派遣募集を行い、7月初旬に派遣者を決定した。派遣者については、新採用者も含めた教員を中心に、次のような組織となった。

8月1日に出発して2日に学習支援を行い、3日に横浜に戻る第1グループから10日に出発する第8グループまでを組織し、毎回110名〜150名程度の教員を派遣することになった。

#### ※派遣教員の内訳

校長 40名  
副校長 32名

主幹教諭 50名  
教諭 901名  
合計 1,023名

教員を派遣するにあたっては被災した子どもの理解や派遣者本人のメンタルヘルス等を考慮した研修等も行い、適切な支援をめざした。

### 工 事務局体制 (図3)

派遣期間中の事務局体制としては、石巻市の会場校に本部を置き、宿泊地である松島市に運営事務局を設置した。

そこでは常に関内本部と連携して情報を収集・管理し、学習支援隊の円滑な運営の推進に努めた。

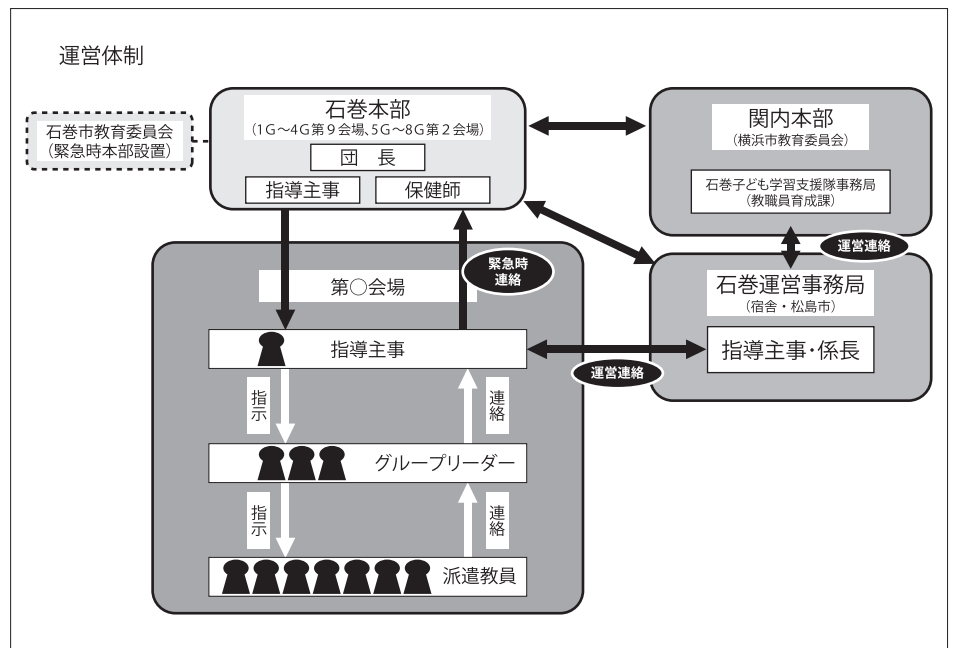
事務局スタッフについては、係長級職員や指導主事を運営担当及びコーディネーター役として派遣し、当日の運営にあたるようにした。複数ある会場の統括や実際の運営責任は、課長級(各グループの団長)の判断のもとで行うようにした。

また、派遣教員の健康管理面を考慮し、健康福祉局からの応援も得て、係長級の保健師を各グループに配置し、健康面での相談にも応じられるようにした。

#### ※派遣した事務局職員

課長級 8名  
係長級 11名(うち  
保健師係長3名 2名は健康

図3 「石巻子ども学習支援隊」の運営体制



#### 福祉局からの応援

指導主事他 83名  
合計 102名

各回の派遣者 15名程度

合計8日間で1226名(延べ)

#### ⑥支援の具体(学習支援)

今回の学習支援では、「夏休み学習会」として、参加した

児童生徒に対し、個々の課題に合わせて学習支援を行った。具体的には、児童生徒が持参した学習課題や夏休みの宿題などのほか、本市が独自に石巻市の子どものたちの状況に合わせて編集・作成した「学習ドリル」を活用し、支援を行った。(写真2)

写真2 学習支援の様子



○「夏休み学習会」について  
午前中の小学生の部は、9時30分～11時30分の2時間。午後の中学生の部は、12時30分～14時30分の2時間を基本とした。担当の教諭の配置については、参加児童生徒数や学年を考慮し、できるだけ少人数指導が行えるようにした。

○「石巻子ども学習支援隊」学習ドリルについて

「学習ドリル」については、横浜市が横浜の子どもの個々の学習支援ツールとして既に作成していた「はまっ子学習ドリル・検定システム」を、「石巻子ども学習支援隊」用に編集し直し、学習支援で活用した。教科については、国語ドリル（国語10ページ、漢字10ページ）、算数・数学ドリル（15ページ）で、小学校1年生から中学校3年生まで学年別に冊子に編集。解答編も別冊で作成した。

○個別の支援方法

持ち寄りった課題や学習ドリルを活用した支援に当たっては、個々に寄り添う形を基本とし、解決に向けてヒントを出したり、解き方を教えたりした。また、答え合わせをして解説を加えたり、類似の問題等で振り返りをしたりも

した。  
「子どもたちや派遣教員の様子」

⑦ 子どもたちや派遣教員の様子  
参加した児童生徒は、2時間の学習時間のなかで、派遣教員の支援のもとで積極的に学習に取り組み姿が見られた。8日間にわたり参加する子どもや、参加日を追加する子どももいて、関心や意欲の高さを感じられた。  
児童生徒からは、「家でやるより学習が進んだ」、「学習会に参加して連立方程式が解けるようになった」など、また、保護者からは帰宅後の子どもの様子から「参加させてよかった」といった声や手紙が寄せられた。（表2）

派遣教員のなかには、自分の役割を果たすことができるか不安を持っている者もいたようだが、グループリーダーを中心に一つの目的に向かって、校種、経験の差を超えて自らの役割を自覚し、学習支援を行う様子が見られた。派遣教員の間では『チーム』という声や自然発生的に生まれ、学習支援隊の一員として充実感をもてたようである。

多くの派遣教員から、厳しい環境の中でも前向きに取り組んでいる石巻市の子どもの姿から元気をもらい、横浜市の子どもたちにも伝えたいと

いう声があがっていた。（表3）

⑧ 参加者の声  
「グループリーダーとして参加した市立学校 校長の声」  
学習支援当日。7時30分、私たちは担当会場となる中学校に到着した。当該校の教頭が迎えてくれ、活動拠点となる2階会議室へ案内してくれた。今回の教室使用は、1年1組～3組の教室と会議室、図書室の5室。指導主事、校長、経験のある教員、そして初任者の計13名で最初のミーティングを始めた。参加者各自が自己紹介。そのうち経験者と初任者の中に東北の被災地出身者や被災地での勤務経験のある者が3名いた。また、神戸出身者で阪神淡路大震災の経験者もいた。

校長としてチームリーダーに指名された私は、「今日はここが一日学校だ。教室があり、教材があり、子どもがいる。我々チームとしてここで学校を開く。お互いに支え合い、役割をしっかりと担って働いてほしい。そして自分の学校の子どもだと思つて愛情をもつて指導にあたってほしい。子どもたちはおそらく笑顔で登校するだろうが、家族を失っている子かもしれない。家を流されて避難所から来ている

子かもしれない。心細い気持ちでくるだろうから、安心して学べるように迎えてほしい。ただし、我々はたった1日で帰る立場なので、相手の気持ちを大切に、節度を失わず、ときに少し遠くからそつと見守ることも大切である。今できる学習支援をつないでいこう。」と、学習支援のスタートを宣言した。

横浜からの派遣教員には、様々な教科担当がいる。どの教員も石巻市の子どもたちのためにと、よく寄り添いあたたかい支援ができていた。  
出合いの一つは子どもたち。ひたむきに頑張る子どもたちに接し、支援した教員が多くを学んだ。教育という仕事は未来を信じる子どもへの伸びようとする力を支え励まし、導くもの。石巻市の子どもたちに出会い、教師という仕事への使命感を感じることできたのではないだろうか。

もう一つの出合いは、若い教員たちとの出合い。当初初めて顔を合わせ、言葉を交わしたその場で役割を決め、このミッションを受けて頑張った。ある教員は、子どもたちを送るために次々と正門に入ってくる保護者の車を整理し、別の教員は昇降口で履物について指示。受付を終えた

子かもしれない。心細い気持ちでくるだろうから、安心して学べるように迎えてほしい。ただし、我々はたった1日で帰る立場なので、相手の気持ちを大切に、節度を失わず、ときに少し遠くからそつと見守ることも大切である。今できる学習支援をつないでいこう。」と、学習支援のスタートを宣言した。

表3 派遣教員の声（活動報告書から）

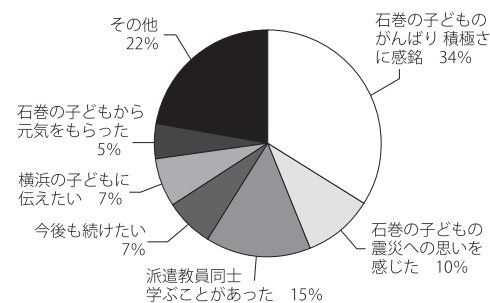
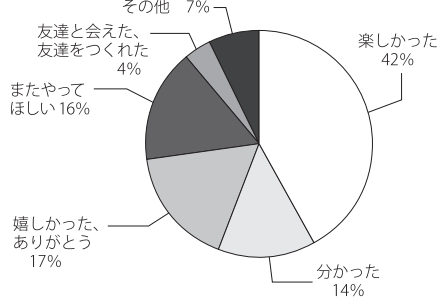


表2 参加した児童生徒の声（活動報告書から）



### 3 終わりに

子どもにも「おはよう。よくきたね。」と笑顔で教室案内をする教員。さらには、教室で子どもたちを待ち受けて座席を指示してあたたかい声をかける教員と実にタイムリーに効果的に受け入れ体制を整えていた。

学習支援に入っても、一人ひとりにしっかりと寄り添い、チームでカバーし合うなど、たった30分の打ち合わせで、仲間を見ながらすべき行動を皆がとることができていた。特に若い教員たちは、先輩の動きを見ながら、さまざまなことを感じ取り、自分の役割を緩やかに変更させていった。教員たちの使命感、深い愛情、柔軟な調整力、チームとして頑張る教員たちとの出会いは新鮮だった。素晴らしい仲間たちと一緒に仕事ができたとへの感謝、そして横浜の未来に頼もしさを感じ帰ってきた。

### 【学習支援にあたった 派遣教員の声】

8月3日、東日本大震災で被災した宮城県石巻市へ子ども学習支援に行ってきました。会場の小学校に着くまでの道で津波にのまれた街の様子を見て、「子どもたちにどんな言葉をかけたらいいのだろう。」という不安でいっぱいでした。しかし、そんな不安を吹き飛ばすように、子どもたちは「おはようございます！」という元気なあいさつと素敵なお笑顔をを見せてくれました。学習は子どもたちの自己課題に応じ、教師が寄り添って支援していく形式で進め、どの子どもも意欲的で元気に楽しく学習することができました。漢字のプリントの丸付けを終えて、100問中97問を正解していた小学4年生の女の子に「しっかりと覚えられているんだね。」と声をかけたところ、「避難所は暇だから、勉強しかやることがないんだ。」という言葉が返ってきました。私は「そうなんだね。」と受け止めるだけで精一杯でした。被災した子どもたちは、ようやく被災したことを口に出せるようになってきたそうです。口に出すことで気持ちの整理をつけ、前に進むうとしていきます。今後、私は被災地の様子や石巻市の子どもの様子を多くの人に伝え、「学習する」とはどういうことか、「生きる」とはどういうことかについて、子どもたちとともに考えていきたいと思っています。

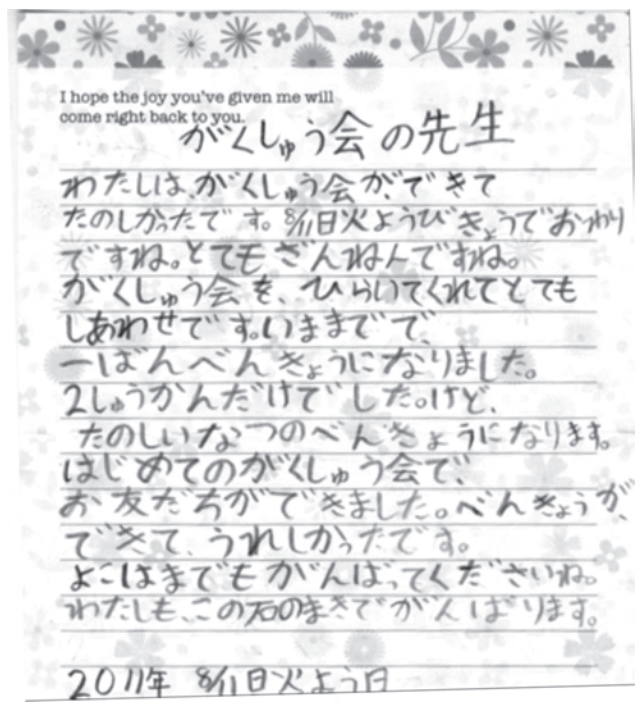
### 【子どもからの手紙】 (写真3)

「石巻子ども学習支援隊」は、準備のために、短期間に数多くの業務を要したが、石巻市、横浜市双方にとって大きな成果をもたらしたと言えるのではないだろうか。

今回の「石巻子ども学習支援隊」の取組では、石巻市との調整をはじめ、日程や宿泊先の決定、参加児童生徒の募集および派遣する教員の確保、学習支援プログラムの立案等、多岐にわたる課題があり、一つの部署だけでの計画立案、実施は難しいことが想定された。

例えば、派遣教員をどのように募集し、どんなプログラムで何日間派遣するかは、一つの課でできることではない。教職員人事課が募集し、教職員育成課がプログラムを組み立て、職員課が日程と宿泊先を確保する。現地の役割分担等調整は、課をまたいだ指導主事が担う。各課が持ち味を生かしながら立案したものを総務課がまとめ、検討会議での議論を積み重ねてきた。そのような中、内部から「チーム横浜」という合い言葉も自然発生的に生まれたのである。支援を終え、派遣された教員からは、石巻市の子どもと

写真3 子どもからの手紙



の感動的な出会いについてや夏期休業が明けた自分の学校での報告等、様々な情報が寄せられた。また、石巻市教育委員会からの礼状には、「子どもたちの励みになり、学習の遅れへの不安が解消された」、「疲弊した教員の休養ができた」、また、「すべての支援を横浜市側が行い負担がなかった」ことなどに対しての感謝の言葉が記されていた。

十分に練った計画のもとでの後方支援活動であったが、常に意識したのは被災地の

人々の立場や気持ちを尊重し、相手に負担をかけず、相手の気持ちになり、支援の押し売りにならないということであった。

3月11日は、日本を大きく変えた日である。横浜市教育委員会も「石巻子ども学習支援隊」という大きな事業を行うことにより、あらためて教育という営みの意義を確認するとともに、「チーム横浜」として、事務局が一体となって取り組むことの大切さを再認識できたと思っている。